

ビートルズの起源

——リヴァプール、1960年代イギリス社会、ビジネス面から見るビートルズ

法学部政治学科4年 阿部史良

目次

- 0、序論
- 1、リヴァプールがビートルズを生んだ
 - 1-1、リヴァプールの歴史
 - 1-2、ロックの原点となる黒人音楽
 - 1-3、ロックの基となった白人音楽
 - 1-4、黒人音楽と白人音楽を結びつけたエルヴィス
 - 1-5、リヴァプールにおけるロックの受容
- 2、豊かな社会に支えられた文化大革命、寛容な社会
 - 2-1、豊かな社会が文化大革命へと繋がった
 - 2-2、許容する社会がビートルズのユニークさを受け入れた
 - 2-3、ミュージックホール文化からの影響
- 3、ブライアン・エプスタインのビジネス戦略
 - 3-1、ブライアン・エプスタインの人物像とビートルズとの出会い
 - 3-2、エプスタインの行なったビートルズのブランディングイメージの構築
 - 3-3、エプスタインのビジネス戦略の策定
 - 3-4、エプスタインがビートルズに与えた最も大きな影響
- 4、結論

0、序論

まず、私がビートルズに興味を持った理由から述べたい。はじめは稚拙な興味からであった。ビートルズと言えば誰もが知っている世界的に有名なイギリスのロックバンドであるが、何が凄くてそこまで人気になったのだろうかという興味からである。その人気の理由を知りたいという好奇心からビートルズについての研究に着手した結果、見事にビートルズの虜になってしまった。今では私のプレイリストはビートルズの曲で埋め尽くされている。特に‘All You Need Is Love’、‘A Hard Day’s Night’、‘Yesterday’、‘Strawberry Fields Forever’、‘I Am The Walrus’の5曲は私の人生に彩りを与えてくれている。ビートルズの魅力以外にも研究を通して気づいたことがある。それはビートルズの誕生には、様々な要因が絡み合っ

ていたということである。この要因とはイギリスの歴史や文化、階級、音楽、イギリス以外の国の音楽、歴史など多岐にわたる。

ビートルズ誕生の理由を探る研究はこれまで多くの学者によって様々な角度から行われてきた。例えば、武藤氏はビートルズの階級やお笑い文化、文学性からビートルズの普遍性を考察しており、また福屋氏はビートルズと都市の関係からビートルズを紐解こうとしていた。本論文ではビートルズの起源を様々な新たな視点から考察していく。ここで用いている起源とは、ビートルズがイギリスで爆発的な人気を博した理由のことを指す。本論文では、その理由をビートルズメンバーが生まれ育った街であるリヴァプールの地域性、1960年代のイギリス社会、ブライアン・エプスタイン (Brian Epstein) のビジネス戦略から分析することを目的としている。そのため、第1章ではリヴァプールの街の歴史や地域性からビートルズがロックバンドとして結成した理由を考察する。第2章ではロックバンドとして誕生したビートルズが社会現象になるまで人気を博した理由を1960年代イギリス社会の特徴から分析する。第3章では第2章で扱ったイギリス社会において、他のバンドではなくビートルズが大人気バンドとなった理由を、ビートルズのマネージャーであるブライアン・エプスタインのビジネス手法から検討していく。そして、結論では、ビートルズがロックバンドとして誕生し、イギリスを代表するアーティストになった背景を改めて確認したい。

1、リヴァプールがビートルズを生んだ

1-1、〈リヴァプールの歴史〉

この章では、ビートルズの4人のメンバー全員が生まれ育った街であるリヴァプールの歴史や地域性がビートルズに与えた影響について記述していく。そして、イギリスにおけるロックンロールの受容の歴史やロックの歴史に対して、リヴァプールというイギリス北部の港町が果たした役割についても記述する。まずは、リヴァプールという街についての概要をまとめていく。リヴァプールは、18世紀から始まった植民地との貿易である黒人奴隷貿易の拠点として中心的な役割を果たした。リヴァプールから工業製品を載せて出航した船はアフリカ大陸で黒人奴隷とその工業製品を交換しアメリカへと運び、アメリカで綿花や砂糖と交換し、リヴァプールに戻ってくるという大西洋貿易で繁栄した。その後、19世紀にイギリスでも奴隷制が禁止されると、次はイギリスでの産業革命で栄える。リヴァプールで原料の綿花を輸入し、繊維工業が発達していたマンチェスターへと鉄道で運び、そこで生産された綿製品をリヴァプールから全世界へと輸出した。このイギリスの産業革命を支える貿易港としてリヴァプールはさらに栄えた。また、19世紀にはリヴァプールはアイリッシュ系移民がアメリカ大陸に向かう際の出発港になっていた。この通りリヴァプールは黒人奴隷貿易や原料・工業製品の輸入と輸出、アメリカ大陸への移民によって繁栄した。

しかし、第二次世界大戦時にはリヴァプールはドイツ軍の激しい空襲に襲われ、第二次世界大戦後にはイギリス全体が不況に陥ったため、リヴァプールは衰退の道を進む事になった。ここまで述べてきたリヴァプールの歴史は、ビートルズにどのような影響を与えたのだろうか。音楽社会学からビートルズの研究を行なった福屋利信氏は「奴隷貿易とアイルランド系移民の中継機能こそが、ビートルズがリヴァプールで誕生することに強い因果を与えることになる。」と述べている。(福屋『ビートルズ——その誕生』p.106) このことについて理解するために、ロックンロールという音楽の誕生の歴史について述べていく。

1-2、〈ロックの原点となる黒人音楽〉

そもそもロックの原点には黒人奴隷の存在がある。リヴァプールを経由した三角貿易によってアメリカに連れてこられた黒人奴隷達のほとんどは、ニューオーリンズを経てアメリカ南部の各地に運ばれ、綿花プランテーションでの労働を強いられた。過酷な労働生活の中で、黒人奴隷達は士気を上げるためや弾圧への怒り、不満を和らげるためにフィールド・ハラーという労働歌を歌った。フィールド・ハラーは個人的な作業に取り組んでいる最中に自分自身のために即興で歌われ、自由に訴えかけるような曲調という特徴を持つ音楽である。南北戦争後の奴隷解放宣言によって奴隷制が撤廃され、奴隷達は自由の身になった後も生活のために重労働を余儀なくされた。その中で平等に扱われたいという欲求や人種差別に対してのやり場のない怒り、孤独感、日々の憂鬱さを表現するものとして、フィールド・ハラーが元となり、ブルースが誕生した。ブルースはギター伴奏に合わせ、自分自身の想いを乗せた語りを読む、歌が主体であるという特徴を持つ音楽である。このブルースは多くのアフリカ・アメリカン達がより良い生活を求めて南部の田舎から北部の工業都市に移動すると同時に新たなスタイルへと発展していった。マディ・ウォーターズ(Muddy Waters)はブルースにエレキギターを用い、バンド・スタイルへと進化させ、ロックの元となった。ブルースをはじめとした様々な音楽が黒人達の間で楽しまれていることを聞きつけた白人達は、1920年代以降、その演奏を録音したレコードを販売し始めた。しかし、販売された当初は黒人達の音楽はレイス・ミュージックと評され、白人達の音楽と明確に分けられていたため、黒人達の間だけで楽しまれていた。それが白人達の間でも楽しめる契機となったのは、1941年のアメリカでの白黒テレビ放送の開始だった。テレビ放送が開始したことにより人々の間でラジオの需要が低下すると、ラジオのチャンネルに空きができたため、黒人音楽専用の番組が作られた。そのことが、白人が黒人音楽を聴くきっかけになり白人達の間でも黒人音楽が楽しめるようになった。

1-3、〈ロックの基となった白人音楽〉

ロックの基となった音楽は黒人達の音楽だけではない。白人達の音楽も大きく影響している。この白人達を分析する上で、重要なキーワードは「移民」である。ここでいう移民

は、1492年のアメリカ大陸発見以降、ヨーロッパ各地からアメリカ大陸に移住してきた移民と、18世紀から19世紀にかけてリヴァプールを経由してアメリカ大陸へと向かっていったスコットランド系・アイルランド系移民の2つに分けられる。前者の15世紀以降のヨーロッパ諸国からのアメリカ移民らによって、ヨーロッパ各地の音楽とアメリカの土着の音楽が融合したフォーク・ミュージックが形成された。フォーク・ミュージックはほとんどが口伝だったため、多くの人に楽しまれるポップ・ミュージックとは対を成すような存在であった。しかし、1950年代以降フォーク・リヴァイヴァルという運動が起き、フォーク・ミュージックがポップ化していく。その後、フォーク・ミュージックの系譜を継ぐアーティストとしてボブ・ディラン（Bob Dylan）が登場し、ロックの概念を打ち立てていく。また、後者のアイルランド系移民達からカントリー・ミュージックが生まれる。このカントリー・ミュージックが生まれるまでの流れは、ブルースができるまでの流れと似ている。このスコットランド系・アイルランド系の移民達が移住するきっかけとなったのは、イギリス国内での宗教的な迫害であった。1801年にアイルランドがイギリスに併合されると、カトリック教徒であるアイルランド人は迫害を受けた。その苦しい生活から抜け出すために新天地を求めアメリカへの移住した人々は、既に移住した人が少ないアメリカ西部へ行くことを強いられた。しかし、西部に向かうにはアパラチア山脈を越えねばならず、その厳しさからそのままアパラチア山脈地帯に定住する人も多かった。そのような移民達は、山奥という環境下での厳しい生活の苦しさを紛らわすために、祖国から持ち込んだ。具体的には、祖国の伝統的なフィールドやギターの奏法に、新たにバグパイプの音を盛り込んだ音楽を楽しんでいた。（福屋『ビートルズとリヴァプール』p.87）また、他のヨーロッパ入植民者の祖国の音楽や黒人音楽の影響を受け、フラット・マンドリンやバンジョーといった楽器を加えたカントリー・ミュージックが成立した。このカントリー・ミュージックはロックの源流になるだけに留まらず、直接的にビートルズに影響を与えている。カントリー・ミュージックの系譜を継ぐアーティストとしてエヴァリー・ブラザーズ（The Everly Brothers）がいる。そのメンバーである兄のフィル・エヴァリーが亡くなった際に、ポール・マッカートニー（Paul McCartney）は自身のオフィシャル・フェイスブックアカウントにて「フィル・エヴァリーは、僕の偉大なヒーローの一人だったよ。彼の弟のドンとともに、ビートルズに大きな影響を与えた一人だ。ジョンと僕が初めて曲を書き始めたとき、僕はフィルで、彼はドンだった。」（'Phil Everly was one of my great heroes. With his brother Don, they were one of the major influences on The Beatles. When John and I first started to write songs, I was Phil and he was Don.'）（McCartney）と述べており、その影響が読み取れる。

〈黒人音楽と白人音楽を結びつけたエルヴィス〉

ここまでロックの基となった黒人音楽と白人音楽の流れについて述べてきたが、ここからはその2つが合わさりロックができるまでの道についてまとめていく。17世紀から18

世紀にかけて、フランスの植民地となっていたアメリカ南部は、それ以外の地域と異なつた独自の文化圏が構築されていた。特にニューオーリンズでは、フランス人と黒人の混血であるクリオールと呼ばれる人々が西洋音楽と黒人音楽であるブルースを融合させ、ジャズを成立させた。(福屋『ビートルズ都市論』 p.30)

さらに、そのニューオーリンズでは 20 世紀、ジャズやブルース、カントリー・ミュージックが合わさり、スキップルという音楽が派生した。スキップルでは、生活の中で使われる洗濯桶、ジャグ、洗濯板、タバコの箱、空き瓶などを楽器として活用された。その後、ブルースとケルト音楽などが混ざりリズム&ブルース (R&B) が成立した。この R&B は人種の枠を超え、白人達奏でられるようになり、ロックンロールが誕生したのだ。このように、黒人音楽と白人音楽の融合の結果、ロックという音楽は誕生したが、この融合という現象が巻き起こったのは、ニューオーリンズ、メンフィスなどの南部の都市であった。そして、そのメンフィスからエルヴィス・プレスリー (Elvis Presley) が登場し、白人達の間にもロックは爆発的な人気を博していった。メンフィスで生まれ育ったエルヴィスは、幼い頃から R&B やカントリー・ミュージックに触れ、ロックに魅了されていた。それだけではなく、黒人のファッションをはじめとした文化にも精通していた。そのため、彼はそのパフォーマンスの中で、黒人の文化に敬意を持った上で徹底的に模倣した。それはファッションや音楽面だけに留まらず、黒人文化のセクシャルな部分も模倣した。そのような刺激的なエルヴィスにアメリカの若者は夢中になり、彼はアメリカ中で爆発的な人気を博した。その人気はアメリカだけに留まらず、イギリスをはじめ世界中に伝播した。ビートルズのメンバーもエルヴィスに魅了された若者の 1 人であった。事実、ジョンとポールはこのような発言を残している。

リバプールを出る直接のきっかけはエルヴィスだった。一度耳にしてしまったら生活のすべてになつてたんだ。ロックン・ロール以外のことなんか考えられなかった。セックスと食べ物とお金は別としても・・・いや、そんなものみんな同じようなものだった。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』 p.10)

ある日、学校の自由時間に講堂でワイワイ騒いでいた時のことだ。誰かが持ってきた音楽雑誌に「ハートブレイク・ホテル」の広告が載っていた。そのエルヴィスがムチャクチャカッコよかったんだ。これだ。これこそほんものだ。エルヴィスこそ救世主だ!って思った。実際に曲を聴いてみてさらに確信した。すぐにファースト・アルバムも出たんだ。それは僕が今でも気に入っているアルバムだ。毎日かけっぱなしにして、必死になって曲を覚えたよ。僕らがやってた音楽は、すべてあのアルバムが基本になつてるんだ。

(ポール；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』 p.19)

この 2 つの発言から、ビートルズの作曲を担当していたジョンとポールはエルヴィスの音

楽に熱中した若者の1人であったことがわかり、ビートルズはエルヴィスが創始したロック音楽の系譜を継ぐアーティストであることが考察できる。

そして、彼以降さまざまなロックスターが登場していく。中でもバディ・ホリーはビートルズに直接的な影響を与えた。バディ・ホリーとは1950年代に活躍したアメリカ出身のアーティストである。ここで、再度ジョンとポールの発言を引用する。

バディ・ホリーは偉大だった。(中略) 僕らに歌と演奏が同時にできることを初めて教えてくれたのはバディ・ホリーだった。それもただ適当にかき鳴らすだけじゃなくて、ちゃんとリフも弾いてね。

(ジョン; ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.11)

あの時代はたくさんのスターが出てきたが、バディ・ホリーは最高だね。バディはナッシュビルの出身で、最初はカントリー・ミュージックで有名になった。僕はバディのボーカル・スタイルが好きなんだ。それに彼の作曲もね。ビートルズで重要だったのは自分たちの歌う曲を自分たちで書いていたことだった。今ではどんなアーティストも当たり前のようになってるけど、当時そんなことをしてる人はほとんどいなかったんだよ。ジョンと僕が曲を作り始めたのは、バディ・ホリーの影響だった。“すごい！この人はミュージシャンなのに曲も書いてるぞ”って興奮したんだ。

(ポール、ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.22)

この発言から、バディ・ホリーの演奏するバンドが作詞作曲するスタイルや、ギター2人、ベース、ドラムというバンドの楽器編成を確立した点がビートルズに影響を与えたと読み取ることができる。

1-5、〈リヴァプールにおけるロックの受容〉

ここまでリヴァプールの歴史やロック誕生までの音楽史について述べてきた。では、リヴァプールという街の地域性はイギリスでのロックの受容、ひいてはビートルズにどのような影響を与えたのだろうか。先述の通り、リヴァプールはイギリスと他国との貿易を行う上での重要な港町であった。1960年代になり飛行機が主要な交通手段になる前は、物流輸送は主に船舶であったため、リヴァプールには様々な国の人々が来訪していた。実際、ジョンはこのような発言をしている。

リヴァプールは、アイルランド人が主食のジャガイモが乏しくなった時に移り住む土地だった。アフリカから奴隷として連れてこられた黒人たちが立ち寄り、そのまま残って住みつくケースもあった。リヴァプールにはアイルランドの血をひく者が多いし、黒人や中国人や、とにかくありとあらゆる人種が集まっている。生活はどんどん厳しくなり街も貧乏になったけど、人々はいじめなかった。ひどい苦勞もしてるけどユーモアの精神を忘れない。ウィットに富んでいて、いつもジョークを飛ばしている。そして、鼻にかかった独特のしゃべり方をする。まるでアデノイド症にかかっ

たみたいだね。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.8)

この発言から、18世紀の三角貿易、19世紀のイギリスと全世界の貿易、そして移民が移住する際の拠点となったリヴァプールでは、多様なバックグラウンドを持つ人々がいたことがわかる。

様々な国の人々が集まるということは、様々な国の文化が集まるということである。さらに、船乗り達もアメリカで流行している音楽のレコードやファッションを持ち帰っていた。リヴァプールはイギリスのどこよりもアメリカ文化に近かった。そのため、リヴァプールではロンドンでも聴くことができないような流行の最先端の音楽に触れることができた。

リバプールはさまざまな人種が行き交う街で、船乗りたちはアメリカからブルースのレコードをたくさん持って帰ってきた。リバプールの港町ではイギリスやヨーロッパの人々がまだ聴いたこともないような古いファンキーなブルースのレコードを聴くこともできた。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.10)

ロンドンを除けばイギリスでカントリー&ウエスタンが最も盛んなのはリバプールだ。ロックン・ロールに出会うまで、僕もリバプールでカントリー&ウエスタンを聴いていた。リバプールの人々は、アイルランド人が祖国を愛するように、カントリー&ウエスタンを愛していた。ロックン・ロール以前にも、リバプールにはフォークやブルース、それにカントリー&ウエスタンを聴かせる、定評のあるクラブがあったんだ。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.10)

ジョンのこの発言から、リヴァプールの港町では様々な音楽に触れることができる点や、アメリカで流行している最先端の音楽に触れることができた点がわかる。

また、ビートルズを産んだリヴァプールの地域性はもう1つある。それは異文化への寛容さである。前述の通り、リヴァプールには多様な人種が集まっていた。そのため、イギリスの他の都市に比べ、異国の文化に寛容であった。この多文化主義というリヴァプールの地域性もイギリスにおけるロックの受容に影響を与えている。多くの地域において、ロックという音楽は基本的に若者が熱中するものであった。それに対し、親世代以上の人々は黒人音楽が基になっている音楽を白人が楽しむべきではないという差別的な蔑視、性的表現が多用されているためキリスト教の伝統的価値観が崩壊してしまうのではないかという危機感からロックを抑圧しようとしていた。一方、リヴァプールではその異文化への寛容さからロックへの抑圧は行われなかった。それだけでなく、リヴァプールを起点にイギリス独自のロックが形成されていく。ロックに魅了されたリヴァプールの若者達、特に労

働者階級の人々は、生活の道具を楽器として使うため真似しやすいスキップルに興じた。こうして、イギリス内でもロックを演奏する若者達の数は増えていき、今日の UK ロックに繋がっていった。

2、豊かな社会に支えられた文化大革命、寛容な社会

2-1、〈豊かな社会が文化大革命へと繋がった〉

第 1 章では、ビートルズがロックバンドとして成立した理由を、彼らの生まれ故郷であるリヴァプールという街から考察した。第 2 章、第 3 章では、ビートルズというバンドがブレイクした要因を分析していく。特に、この章では 1960 年代のイギリスがビートルズの人気に与えた影響について考察する。ひとえに「1960 年代のイギリス」と言っても様々な側面があるが、特に社会面からの影響を考究していく。

1960 年代のイギリスの社会は「文化大革命」と「許容する社会」という特徴を有していた。文化大革命は「1960 年代のイギリスで生じた文化の動揺ないし転倒」(小関 p.11) と定義される。つまり、ベートーヴェンの第九交響曲などのクラシック音楽やシェイクスピアなどの古典文学に代表されるハイ・カルチャーは、当時の大衆に人気を博しているポピュラー・カルチャーよりも価値が高いという価値観を大転換させた。この文化革命の前提には「豊かな社会」の存在がある。豊かな時代とは、アメリカの経済学者 J.K.ガルブレイス (John Kenneth Galbraith) が『ゆたかな時代』の中で提唱した概念であり、資本主義により経済的に発展した 1950 年代後半のアメリカ社会をこう呼称した。ガルブレイスはアメリカ社会に対してこの概念を用いたが、イギリスの豊かな社会はどう定義できるだろうか。ここでは、イギリスにおける豊かな社会を戦後の緊縮期を経て経済成長と賃金上昇が起き、それに伴って大衆による大量消費が起きた 1950~1960 年のイギリス社会と定義する。ではなぜ、この豊かな社会が文化大革命につながったのだろうか。そこには、イギリスの戦時中・戦後の状況が影響している。第二次世界大戦中、イギリス国内では戦争に勝つために国に貢献する行動をしなければいけないという同調圧力が蔓延していた。さらに、第二次世界大戦後はアメリカへの戦債の返済のために、イギリス経済は逼迫していた。つまり、その当時の若者は幼少期に戦時中の他者への同調と戦後の経済的困窮を強いられていたのである。そのため、成長し働き始めたことで経済的余裕を獲得した若者は購買を通じて自己表現・自己決定を行おうとした。その中でイギリスに経済成長と賃金上昇が訪れ、前述の豊かな社会が到来した。この豊かな時代の恩恵は自身で稼ぎ、自由に使えるお金を持つ労働者階級の若者が最も享受した。そして、労働者階級の若者は大人への反抗、自己表現のために消費を行い、新たな文化が形成されたのである。特に、自己表現が盛んに行われたのはファッション面であり、同じ労働者階級の若者でも服装によって属する集団が分かれ、テディ・ボーイズ、ロッカーズ、モッズなどの「族」と呼ばれるものが誕生した。

このように自己表現にファッションが用いられた背景には、都市の匿名性があると考えられる。都市と地方の違いとして、匿名性の存在が挙げられる。人口が少なく、付き合いがある人が限定的な地方では、すれ違う人の階級や職業、身分などを知っている。それに対し、都市では人口が集中しているため、すれ違う人は基本的に見知らぬ人である。これが都市の持つ匿名制である。この匿名性のために、都市ではすれ違う人の身分や階級、職業については、身なりで判断される。結果として、身なりの重要性が増し、服装は自分の所属について表現するものになったのである。ビートルズのマネージャーであるブライアン・エプスタインはこれを巧みに利用した。ビートルズは元々リヴァプールにいた際はロッカーズという族の格好を好んでしていたが、それでは一般の世間からの受けが悪いと判断し、モッズ風のファッションにするように指示した。この点に関しては、ビートルズのマネジメント戦略に関して述べる第2章で詳しく記述する。

話を豊かな時代を受け起こった文化革命へと戻す。前述した通り、豊かな時代の恩恵を最も享受したのは労働者階級の若者であった。「旧来の制度や規範に苛立つ彼らの自己表現の欲求がコマーシャリズムと結びつき、それまでの常識を覆すような新しい文化的商品が相次いで登場して、文化革命と評しうる状況が生まれた。」(小関 pp.32-33)と小関は分析している。その中で、その革命が顕著であったものの1つがロックである。ロックはロックンロールに他の様々な音楽的要素を付け加え、発展させたものであるが、そのロックンロールは労働者階級の若者の間で人気を博した。ロックンロールは音楽教育を受けていない労働者階級にとっても真似しやすいものであり、既存の価値観や体制への反抗を表現するための手段としてロックンロールを好んだのである。後述するミュージックホール文化からの影響も相まって、人々の間でロックンロールは労働者階級の音楽という印象が形成されていった。そうすると、売り手側も購買意欲も高く、数も多い労働者階級の若者を離さないように、ロックンロールは労働者階級の音楽というイメージを推し進めていった。ビートルズもその例外ではなく、自分たちは労働者階級の英雄であるということを強調していった。ビートルズのメンバーは文化革命の中で普及したロックンロールに憧れ、ロックバンドを結成した。さらに、文化革命の風潮がイギリス国内に溢れていたこともビートルズが社会現象を巻き起こしたことの要因であった。

2-2、〈許容する社会がビートルズの実儀の悪さを許した〉

1960年代のイギリス社会の2つ目の特徴である「許容する社会」は、「旧来のルールや慣習、モラル、規範の拘束力が弱体化した社会」(小関 p.133)と定義できる。1960年代のイギリスでは法的規制の緩和とキリスト教的価値観の弱体化が起こっていたのである。許容化が起こった原因としては、まず1960年代には「自己」に拘る風潮が流布していたことが挙げられる。戦時中に同調圧力が蔓延したことへの反動として、「自分がどうあるべきか」は自分が決めることであるべきという価値観が流行したのだ。次に、第二次世界大戦後のコンセンサス政治も影響している。このコンセンサス政治では、社会的・文化的自由主義が柱

の1つであった。個人の私的領域に対しての国家による介入を極力分けるという政治の方針が取られていたのだ。

さらに、許容する社会には前述の豊かな時代も影響している。経済的に豊かになった人々は、宗教への依存を弱め、次第に教会に通わなくなっていった。人々への影響力が弱体化したキリスト教は、同性愛やポルノグラフィ、離婚、性生活などの自由化を認めることで、その影響力の回復を試みたのだ。また、許容化には、この時代にエリート支配へ懐疑が向けられていたことも影響している。1960年代のイギリスは繁栄を実現しつつ、経済成長率は低迷しており、その状況は「イギリス病」と評された。そして、その原因は伝統的に世襲されてきたエリート支配にあるのではないかと考えられた。その結果として、能力主義に注目が集まり、新たな文化や価値観の流布をサポートした。1960年代のイギリスが許容する社会であったおかげで、ビートルズの行儀悪さは受け入れられた。ビートルズといえば、ほどよい行儀の悪さを特徴に持つ。しかし、その行儀の悪さには、ユニークさや皮肉さが含まれている。「安い席の人は手を叩いてくれるかな？それ以外の方は、宝石をジャラジャラ鳴らしてください。」（‘Will the people in the cheaper seats clap your hands? And for the rest of you, if you’ll just rattle your jewelry.’）（‘John Lennon’）というロイヤル・バライティ・ショーでのジョンの一言に、その行儀の悪さ、ユニークさは最もよく表れている。ロイヤル・バライティ・ショーにはエリザベス女王も来ており、この「それ以外の方」には女王陛下も含まれていた。この女王陛下に対してすらジョークを言う態度が許されたのは、当時のイギリスが許容する社会であったからに他ならない。

2-3、〈ミュージックホール文化からの影響〉

次にイギリスの音楽面がビートルズに与えた影響として、ミュージック文化が挙げられる。ミュージックホールとは、19世紀末から20世紀初頭にかけて流行したコンサートホールとパブの中間のような存在の娯楽施設であり、そこでは音楽だけでなく、劇やお笑いなどが行われていた。このミュージックホール文化がビートルズに与えた影響として大きく2つが挙げられる。1つ目は、イギリスでロックンロールが人気を博す土壌を形成したことである。第1章で述べた経緯で誕生し、リヴァプールで受け入れられたロックがイギリス全土で人気になったことにはこのミュージックホール文化が影響している。ミュージックホールが流行した当初は、民俗音楽が変化したワルツなどの社交ダンスのための音楽が演奏された。しかし、次第にロックンロールなどのアメリカ音楽が演奏されるようになっていった。ミュージックホールは全土にあったため、ロックはイギリス中に広がっていった。このように、イギリス国内でロックンロールの存在を広める役割をミュージックホールは果たした。

2つ目は、ロックは労働者階級の音楽という構図を形成したことである。労働者階級の若者が既存の体制や価値観への反抗にロックを用いたため、ロックは労働者階級の音楽というイメージを持たれるようになったことは前述した通りである。しかし、労働者階級の若者

が反抗にロックを用いたことやこのイメージの根底にはミュージックホールの存在があったのだ。その理由はミュージックホールでは労働運動が行われたためである。20世紀前半、マンチェスターやリヴァプールなどの工業都市部では、大量生産システムの導入に伴い、労働人口が増加したが、労働環境の整備は追いつかず劣悪な環境での労働を強いられていた。その労働状況や条件の改善を求め、労働者たちは政府に対し、デモやストライキといった抵抗運動である労働運動を起こした。この労働運動では、多くの人を巻き込むために一見すると楽しそうに思えるようなダンスや音楽が用いられていた。当初は街中で行われていた労働運動だったが、それに対し政府は徐々に制限や圧力をかけ始めたため、次第に労働運動は政府の目の届かない場所である小さなパブやライブハウスなどで行われるようになった。そのことに気づいた政府は、次にそのパブやライブハウスが営業できないように規制を課したため、ミュージック・ホールで労働運動が行われた。前述の通り、ミュージックホールではロックンロールが演奏されていたため、その系譜を継ぐロックも労働者階級の音楽であるというイメージの土壌が形成された。

3、ブライアン・エプスタインのビジネス戦略

3-1、〈ブライアン・エプスタインの人物像とビートルズとの出会い〉

この章では、ビートルズのマネージャーであるブライアン・エプスタイン (Brian Epstein) がビートルズに与えた影響について考察していく。

まず、ブライアン・エプスタインという人物についての概要を記述する。エプスタインはリトアニアから迫害を逃れるために移住してきたユダヤ人を祖父に持つ。リヴァプールには、アイルランド系とユダヤ系の人々が多くいたが、彼もその1人だったのだ。幼い頃から演劇に興味を持っており、RADA (王立演劇アカデミー) に入学するものの、翌年にはリヴァプールに戻った過去を持つ。その後は、家族が経営していた NEMS (ノース・エンド・ミュージック・ストア) のレコード部門の責任者としてリヴァプールのレコード店で働く。このことからわかるように、エプスタイン自身は中産階級に分類される。

レコード店のオーナーとなったブライアンは自身が客として店を訪れた際にイライラさせられた経験から「ないレコードはない」というモットーを掲げ、経営に勤しむ。その経営方針が功を奏し、NEMSは大盛況し、すぐにホワイト・チャペル通りに2号店を開く。リヴァプールでバンドとして活動していたビートルズのメンバーはこの店でレコードを試聴・購入し、ビートルズのレパトリーにしていたが、ブライアンはその様子をしばしば目撃し、汚らしいレザーの集団が来たと睨んでいた。(ルイソン『ビートルズ史〈下〉』p.132)

エプスタインとビートルズの出会いにおいて、大きな転機となるのは、NEMSへの *My Bonnie* の注文である。*My Bonnie* とは、イギリス人歌手トニー・ジェリダンのボーカル

に当時のビートルズメンバーであるジョン・レノン (John Lennon)、ポニー・マッカートニー、ジョージ・ハリスン (George Harrison)、ピート・ベスト (Peter Best) の演奏がバックに収録されたもので、ビートルズの演奏が初めて収録されたレコードである。前述の通り、客からリクエストされたレコードは必ず入手することがモットーだったエプスタインは *My Bonnie*、そしてビートルズの調査に取り掛かった。1961年11月9日、エプスタインはキャバーン・クラブに訪れ、ビートルズの演奏を初めて聴き、衝撃を受ける。エプスタインは、ビートルズのパフォーマンス中のユーモアのセンスやビート、サウンドに感銘を受け、ビートルズには言葉にはできないスター性が備わっていると感じた。ビートルズの虜になったブライアンは、彼らはエルヴィスよりも大物になると感じ、彼らのマネージャーを務めたいと考えるようになる。(ルイソン『ビートルズ史〈下〉』pp.216-232)

一方、ビートルズ側も演奏の仕事を見つけることや、楽器店への借金でピンチに瀕していたためマネージャーを必要としていたため、エプスタインが自分たちのマネージャーをやろうとしていることを知ったビートルズのメンバー達は驚くと同時に歓喜した。

エプスタインはレコード屋で客の相手をしてるだけで、やることがなかった。そういう時に不良のロッカーが大音響で音楽をやってるのを見て、多くの若者がそれに夢中になってるのを知ったんだ。で、“これが自分のやるべき仕事だ”って思ったのさ。彼は気に入ったんだよーあの雰囲気だね。彼は僕らのマネージャーになりたいと考え、自分にはできると思うと言ってきた。僕らも彼よりいい人間を知らなかったから、わかった、やってくれよ”と言ったのさ。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.67)

ジョンのこの発言から、エプスタインがレコード店を営む中でロックが若者の間で人気を博していることを知ったこと、そして彼自身もロックの魅力に気づいていたことがわかる。

3-2、〈エプスタインの行ったビートルズのブランディングイメージの構築〉

では、エプスタインはビートルズにどのような影響を与えたのだろうか。この当時のビートルズにとっての当面の目標は、ビートルズ単体のレコードを出版することであった。エプスタインはその目標を達成するためのマネジメント行動を取っていった。ここでは、マネージャーに就任したブライアンが行なったマネジメント行動を「ブランディングイメージの構築」と「ビジネス戦略の策定」の2つに分類する。

まず、「ブランディングイメージの構築」について、記述していく。ブランディングイメージの構築は、「彼らのルックスや態度で相手をひるませないこと、大切な客にあとずさりさせない」(ルイソン『ビートルズ史〈下〉』p.316) ための行動と定義する。ビートルズは一旦受け入れられさえすれば、エルヴィスのようなビックスターになる素養を持っている。しかし、見た目などで最初から受け付けてもらえなければ意味がない。スタート

地点に立たせてもらえるように、大衆受けするスマートに、シャープな印象を人々に与えるためのマネジメント行動である。この行動はさらに「ステージ上での振る舞い」、「服装の変更」、「セットリストの策定」の3つに分類できる。

まず、「ステージ上での振る舞い」について述べる。エプスタインがマネージャーに就任する前、ビートルズメンバーはライブ中、かなり自由奔放な行動をしていた。エプスタインは、それではライブ中のビートルズの印象を音楽に関係ないところで下げてしまい、新しいファンが獲得しづらいと考えた。そこで、エプスタインはステージ上での喫煙や食事、汚い言葉遣いをやめさせた。さらに、前方の客だけに話しかけることもやめさせた。これは、前方以外の客に疎外感や、何かを見逃したというような喪失感を与えてしまうためである。

ブライアン・エプスタインはこう言った、なあ、本当にもっと大きな場所でやりたいのなら、変わらなきゃだめだ。ステージでものを食べるのはやめろ、汚ない言葉を使うな、煙草を吸うな……。

成功するか、ステージでチキンを食べ続けるか、どっちかだった。僕らは彼の考えを尊重した。チーズ・ロールやジャム・パンをかじるのもやめた。もっと自分たちのやってることを考え、遅刻しないようにして洒落た格好をするようになったんだ。

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.67)

この発言からメンバーはステージ上での振る舞いについてのブライアンのアドバイスを素直に受け止めていることがわかる。

また、エプスタインはライブ中のステージ上でのお辞儀を導入した。これは、ブライアンの演劇学校での経験から導入され、ビートルズのライブパフォーマンスの1つの個性へととなった。ビートルズメンバーと仲が良く、ドライバーなどの役割を果たしていたニール・アスピノール (Neil Aspinall) は次のように語っている。

ブライアンの演劇の経験が生かされた。服装も、1曲ごとに客席に向かってお群儀することも、そこから来てるんだよ。ギターの手を切るのもそうだ。当時はギターの弦が高かったから、弦が切れたらその場をほどいて引っ張って、結び、それから巻き上げて演奏に戻る。ギターの先から抜がぶら下がって、あんまり見た目はよくなかったね。だからブライアンがアドバイスしたんだ。“その先を切って、もっとすっきりさせろ。一般のお客さんにも見ってもらえるように”。そういう案に最初はみんな渋ったよ。ギターの手の場合は、全部外して新しいのに張り替えるってことになるし、そうなると時間もかかる。お群儀の方はジョンもやったけど、渋々。両手をひらひらさせてみたり、各階にいる僕らにわかるような皮肉を言ったりしてた。僕らは彼のやってる意味がわかるから笑ってたけど、客には全然わからなかったと思うよ。

(ニール・アスピノール；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.67)

この発言からブライアンの演劇の経験が活かされ、ビートルズのパフォーマンスにお辞儀が導入されたことがわかる。

次に「服装の変更」について述べる。ビートルズのメンバーは、リヴァプールやハンブルクで活動していた時はロッカーズに属する格好をしていた。ロッカーズとは、ダブル衿の革ジャンにジーンズや革パンツを着用という特徴を持つ族の1つである。このような服装をしていたらテレビはもちろんのこと、ラジオの仕事も来ず、劇場からも声がかからないため、ツアーが組めず、当面の目標であるレコード制作のチャンスも逃してしまう可能性がある。このような理由から、エプスタインはビートルズに対し、次のようなアドバイスした。

僕はまずレザー、ジャケットをやめるように初めた。そのあとすぐに、ジーンズで出るのも禁じた。それからステージでセーターを着せ、やがて、彼らはすごく嫌がったけれども、スーツを衣装にさせた。よく覚えていないが、初めてスーツを着たのはBBCでライブ名を前に演をした時だったかもしれない。

(ブライアン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.73)

ブライアンはこのようにアドバイスを行なったが、それに対してビートルズはどのような反応をしたのか。ロッカーズに属するファッションは、1961年当時では流行遅れのファッションであったため、リヴァプール周辺では受けが良かったが、他の場所では客からも冷たい反応をされており、ビートルズメンバーも薄々服装を変える必要性を感じていた。そのため、渋々でありながら、人前に出るときはスーツを着用することを受け入れた。

リヴァプールを出て、南部あたりでレザーを着てると、ダンス・ホールのプロモーターなんか嫌がられた。ゴロつきの集まりみたいだって思われたのさ。それでエプスタインが言い出したんだ、“ねえ、スーツを着ればこれだけの金になる…”。それにみんな、仕立てのいい、シャープな黒のスーツが欲しかったんだ。革とジーンズも好きだったけど、いいスーツも欲しかったんだよ。ステージ以外で着るためにもね。それで言ったんだ、“ああいいよ、スーツを着よう。金を出してくれるなら、ブカブカのラッパズボンでもはいてやる。革なんて、そんなに好きじゃないからね！”

(ジョン；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.73)

この発言からメンバー達もロッカーズのファッションはもはや時代遅れであり、若者からも受けが悪いことを感じ取っていたことがわかる。

次に、「セットリストの策定」について。現在では、アーティストがライブ前にあらかじめパフォーマンスする曲を決めておくことは当たり前のこととなっている。しかし、当時のアーティストのほとんどは、ライブ中に、その時の客層や客の雰囲気などを見ながら、次に演奏する曲をライブ中に決めていた。しかし、エプスタインは、ビートルズに対

し事前にライブで行うプログラムの内容を決めるように指示した。これは、当時ビートルズが出演するステージの多くは、出演時間が厳格に決まっていたため、その時間内で演奏できる最適な曲数で、観客の中にビートルズという存在の印象を残すことが狙いであった。

3-3、〈エプスタインのビジネス戦略の策定〉

次に、エプスタインが行ったマネジメント行動の2つ目の分類である「ビジネス戦略の策定」について述べていく。ここでは、「ビジネス戦略の策定」を、ビートルズが人々から人気を獲得するための長期的な活動指針と定義する。この行動は「オリジナル曲の積極的な披露」と「ファンクラブの拡充」、「ライブ出演料の増加」の3つに分けることができる。

まず、「オリジナル曲の積極的な披露」について。ビートルズといえば、ジョン・レノンやポール・マッカートニーを中心としたメンバーが自らオリジナルの曲を作曲することが特徴の1つである。しかし、レコード出版前のジョンとポールは自分達が作った曲に自信がなく、披露に消極的だった。ジョン・レノンとポール・マッカートニーの2人がビートルズのオリジナルの曲を作ることができると知ったエプスタインは、そのことはビートルズ独自のセールスポイントになると考え、徐々にオリジナル曲を披露するようにビートルズに伝えた。その証拠として、エプスタインがそのことを知ったタイミングからビートルズは自分たちのファンがいるキャバーンでオリジナル曲を披露するようになった。

また、エプスタインはファンクラブというものを積極的に活用しようとした。エプスタインがマネージャーに就任する前からファン達が自主的に設立したファンクラブはあった。このファンクラブはモーリーン・オシェイとジェニファー・ドーズというファンが設立したものである。エプスタインがマネージャーに就任する前にポールの父親のジムは、この2人にビートルズのマネージャーをやってほしいという依頼をした。マネージャーになることを負担に感じた2人はファンクラブ運営とマネージャー業務の両方から手を引いてしまったため、ジムは新たにロバータ・ボビー・ブラウンというファンに運營業務を依頼した。このような流れを辿ってきたビートルズのファンクラブだが、エプスタインがマネージャーに就任すると、ファンクラブ運営は大きな動きを見せる。エプスタインはまずファンクラブのシステムを整備し公正な組織として発足させるために、一時的に活動をストップさせた。この際、運営に関わっていたボニーはそのまま首にはせず、緊密なパートナーシップを結び自身の秘書にした。その後、エプスタインはファンクラブを充実させるためのプランを練った上で運営をしていく。具体的には、ファンクラブに加入するインセンティブを設け、ファンに対してファンクラブへの加入を促した。例えば、ファンクラブに加入している人だけのみが観覧できるライブ‘The Beatles for their friends’を開催した。このライブは、サイン用のブロマイドとファンクラブ会員費の初年度無料の特典付きであり、多くのファンが参加した。また、ファンクラブに加入している人にはビートルズの最新出演情報や応援のための活動が詳しく記述されている会報が届いた。このメーリング・リストはマーケティングにも活

用された。では、なぜエプスタインはこのようにファンクラブの運営に注力したのか。エプスタインにはファンが離れることを阻止する狙いがあったと考察できる。ファンのビートルズへの熱は流動的なもので、容易く冷めてしまう。ファンクラブを通して、定期的にビートルズに関するコンテンツをファンに提供することで、ファンのビートルズへの熱が冷めづらくすることをエプスタインは狙っていた。

また、エプスタインはビートルズのライブの出演料を上げるという働きもした。マネジメントの契約に関する話し合いの際に、ビートルズのメンバーはライブのギャラに関する不満をエプスタインに伝えていた。エプスタインはその場で、出演料について何か策を講じるとメンバー達に伝えた。実際、ブライアンがマネージャーに就任して3週間で収入を上げた。その時のビートルズメンバー達の反応は以下の通りである。

僕は感動したね。それまではこの先4週間火曜日の夜に出てくれてどこかの店の経営者から言われて、それを誰かがメモ帳に書いておく。まあ、ポールかビートかな。そうやって出演契約をするにはするんだけど、いつでも行き当たりばったりだった。ところがブライアンが来てまずやったのは、キャバーンでの出演料を7ポンド10シリングから15ポンドにすることだった。いきなり倍になったんだ。

(ニール・アスピノール；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.67)

ギグの内容もよくなっていた。それにギャラもほんのわずかとはいえ、上がってはいたんだ。演奏する場所も前よりいいところになってきてたね。僕らはまだロックをやっていたんだけど、キャバレーを除くと、ロックじゃ、どこのギグでもたいして金はもらえなかった。僕は「ティル・ゼア・ウォズ・ユー」とか「テイスト・オブ・ハニー」なんかができたーキャバレー向きの曲だよージョンは「オーバー・ザ・レインボウ」や「エイント・シー・スウィート」をよくやってた。僕らにとっては信頼できる曲だったのさ、ジーン・ビンセントのアルバムに入ってたんだから。「レインボウ」がジュディ・ガーランドの曲だとは知らなかったんだよ。ジーン・ビンセントの曲だとばかり思ってたから、喜んでやってたんだ。

(ポール；ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』p.67)

これらの発言からブライアンの働きを受け、ギグの出演料が倍になったこと、そして自分たちのギグの内容も良くなったことにメンバー達が感動していたことがわかる。

3-4、〈エプスタインがビートルズに与えた最も大きな影響〉

このようなマネジメントを行ってきたエプスタインだが、前述の通りこの当時のビートルズの目標はレコードの出版であった。もちろん、エプスタインはこの目標に向けても行動をしていく。マネージャーに正式に就任する前、つまりビートルズと契約を結ぶ前から、ビートルズのレコード出版に向けて、レコード会社に対し飛び込み営業を行っていた。この飛

び込み営業には、エプスタイン自身がレコードショップを経営するにあたり獲得した人脈を活用した。しかし、この営業も一筋縄ではいかなかった。デッカ・レコードへ持ち込み、オーディションまで漕ぎ着ける事に成功したものの、オーディションを経て落とされてしまったのだ。この事にエプスタインやビートルズはひどく動揺し落胆したものの、エプスタインはそこで諦めなかった。次に、エプスタインはEMIレコードの子会社に営業をかけた。この動きの中でエプスタインは、ビートルズにとって、もう1人のキーパーソンであるジョージ・マーティン（George Martin）とビートルズを結びつけたのだ。このことはビートルズが大人気グループになることのきっかけとなった。というのも、ジョージ・マーティンはビートルズに音楽面で大きな影響を与えたからだ。ここでジョージ・マーティンの人物像についてまとめておく。マーティンはEMI傘下のレコード会社であるパーロファンの社員であり、多くのアーティストのレコード制作を手掛けていた。彼自身、幼い頃からピアノに触れていたため、絶対音感も持っており、パーロファン入社前は軍の音楽隊在籍後、ギルドホール音楽学校を卒業していた。このような経歴を持つ彼は、ビートルズの音楽教師のような役割を果たした。具体的には、レコーディングの際にジョンとポールが作ってきた曲を聞いた上で、自身の音楽の専門知識を駆使し、アレンジ案や改良点を指示した。また、ビートルズのメンバーより、遥かに音楽技法に関する知識が豊富であったマーティンは、メンバーに音楽創作に関しての様々な刺激を与えた。ジョージ・マーティンの存在がなければ、ビートルズの音楽は現在知られているものにはなっていなかっただろう。そこまで大きな存在であるジョージ・マーティンとビートルズを結びつけたことこそ、エプスタインがビートルズに与えた最も大きな影響の1つと言えるだろう。

4、結論

福屋氏はリヴァプールをはじめとして、ハンブルク、ロンドン、東京といった諸都市との関係からビートルズを分析していた。小関氏は1960年代のイギリス社会がどのようなものであったかを深く論考していた。ルイソン氏は『ビートルズ史』にて、ビートルズ結成までの出来事を時系列に沿って、細かく記述していた。それに対し、本論文では、ここまでビートルズの起源をリヴァプールの地域性、1960年代のイギリス社会、ブライアン・エプスタインのビジネス戦略から分析してきた。この3つの要素のどれを欠いてもビートルズは今日までの人気を獲得することはなかったと言っても過言ではないだろう。ジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ジョージ・ハリスン、リンゴ・スターの4人がリヴァプールという街で生まれ育ったからこそビートルズはロックバンドとして誕生した。そして、豊かな社会を前提とした文化大革命、許容する社会を特徴とする1960年代のイギリスで活動したからこそ、ビートルズはブレイクした。さらに、ブライアン・エプスタインがマネージャーにいたからこそ、ビートルズはイギリスを代表するロックバンドとしての地位を確立できた。ビートルズはリヴァプールで生まれ育ち、1960年代に活動したか

らこそ、世界的ロックバンドになりえたのだ。

もちろん、それ以外にもビートルズが誕生し、世界中で大人気なバンドへと成長したことに影響を与えた要素は沢山あるだろう。例えば、それぞれのビートルズメンバーの特徴である。ビートルズといえば、個性豊かな4人のメンバーがいることを特徴とする。各々のメンバーの特質性がどのようにビートルズの人気に繋がったかについても研究できたかもしれない。他には、ビートルズの楽曲性が挙げられる。ビートルズの楽曲や演奏方法を音楽学的観点から分析すれば、これまで捉えられていないビートルズの起源を掴むことができるかもしれない。これ以外にも、ビートルズの階級、アメリカをはじめとした他の国との関わりなど、ビートルズ誕生の要因として考えうる要素を挙げれば、枚挙にいとまがない。今後はビートルズのそれぞれのメンバーに注目した研究を行なっていきたい。今後もビートルズ研究は盛り上がっていくことが予想できる。後続研究によって、様々な角度からビートルズが分析されていくことも楽しみにしている。

【参考文献】

- ・ガルブレイス、ジョン・ケネス 訳：鈴木哲太郎『ゆたかな社会 決定版』（岩波現代文庫、2006年）
- ・川北稔『イギリス近現代史講義』（講談社現代新書、2010年）
- ・川北稔『イギリス史』（山川出版社、2020年）
- ・小関隆『イギリス1960年代——ビートルズからサッチャーへ』（中公新書、2021年）
- ・佐藤誠二郎『ストリート・トラッド——メンズファッションは温故知新』（集英社、2018年）
- ・武田知弘『ビートルズのビジネス戦略』（祥伝社新書、2011年）
- ・難波弘之『近代レコーディングの冒険——プロデューサーと録音技術から見たビートルズ、シンセなき時代の革新者たち』（研究紀要、第16号、1992年、pp.43-58）
- ・福屋利信『ビートルズ都市論——リヴァプール、ハンブルク、ロンドン、東京』（幻冬舎新書、2010年）
- ・福屋利信『ビートルズ——その誕生から解散まで、すべては必然であった』（英語と英米文学、第51号、2016年、pp.101-139）
- ・ビートルズ『ザ・ビートルズアンソロジー』（株式会社リットーミュージック、2000年）
- ・前田絢子『エルヴィス・プレスリー——社会変化を促すサウンドとしてのロックンロール』（フェリス学院大学文学部紀要、第46号、2011年、pp.253-272）
- ・みの『戦いの音楽史』（株式会社KADOKAWA、2021年）
- ・武藤浩史『ビートルズは音楽を超える』（平凡社新書、2013）

- ・ルイソン、マーク 訳：山川真理・吉野由樹・松田ようこ『ビートルズ史〈上〉』（河出書房新書、2016年）
- ・ルイソン、マーク 訳：山川真理・吉野由樹・松田ようこ『ビートルズ史〈下〉』（河出書房新書、2016年）
- ・和久井光司『ビートルズ——20世紀文化としてのロック』（講談社選書メチエ、2000年）
- ・和久井光司『ビートルズはどこから来たのか』（DU BOOKS、2017年）
- ・‘John Lennon:“...Just Rattle Your Jewelry” + Twist and Shout’（2008/01/03、<https://youtu.be/rvBCmY7wAAU>）
- ・McCartney, Paul ‘Paul Remembers Musician Phil Everly Who Passed Away Last Week’（Facebook、2014/01/08、https://www.facebook.com/photo.php?fbid=10152233885918313&set=a.488766413312.281294.182736663312&type=1&stream_ref=10）